平成１９年３月１日発行

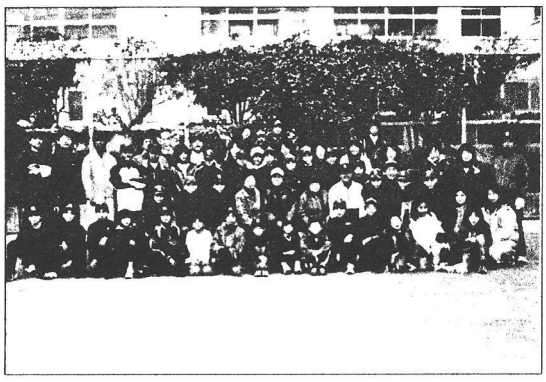
かまぼこ

第２３号

発　行　わがまち大田蒲田西地区推進委員会
編　集　地域情報紙編集委員会

わがまちの顔

ソフトボールチーム　矢口イーグルス



矢口小学校ソフトボール部「矢口イーグルス」は、昭和53年に、ソフトボール愛好会として、橋先生が創設されました。

当時のチーム名は、男子5・6年生が「矢口栄」、女子が「矢口美」、3・4・5年生が「矢口志」でしたが、橋先生が矢口小学校を去り、次の後継者へと受け継がれ、のちに「矢口イーグルス」というチーム名になりました。

現在、藤田栄氏が代表を務め、磯部亨さんを監督として、25名の子供達が練習に励んでいます。藤田代表は、20数年間、情熱と努力で子供達を指導し、春・夏関東大会出場、東京都大会準優勝、秋季大田大会、城南大会連続優勝等、数多くの素晴らしい結果を残しています。

最近の矢口イーグルスの活躍をみてみますと、平成18年7月8日・9日に、葛飾区柴又で開催された、第27回東京都小学生男女ソフトボール大会、東京新聞・東京中日スポーツ杯争奪戦で優勝しています。

平成18年8月5日から8日まで、福岡県北九州市香月運動場にて開催された、第20回全日本小学生男子ソフトボール大会出場は、予選会の結果やそれ以外の戦績を見て、推薦チームを決定します。

矢口イーグルスは戦績により、東京都ソフトボール協会の推薦にて、出場権を獲得しました。

一回戦はシードにより、二回戦からの出場になり、大阪代表の松原男子に5対0で全日本初出場で初勝利しました。三回戦では長崎県代表の0Hフレンズに9対7で勝利、準々決勝で福岡県代表の小倉第一ジュニアホークスに2対3で惜しくも負けてしまいました。

しかし全日本初出場ながらもベスト8という素晴らしい成績を残しました。

全日本大会出場前には、選手激励壮行会が開かれ、各自治会・町会長、学校関係者、商店街関係の皆様等、多数の出席をいただき、盛大な会になり、子ども達も緊張の中、大いに励みになったのではないでしょうか。

同じく8月12日・13日に群馬県前橋市北部運動場にて開催された、第23回関東小学生（男・女）ソフトボール大会では、関東大会初優勝を飾っています。

3月で卒業する六年生の部員にとって、「矢口イーグルス」は良い思い出になると思います。また、新しく入部する部員達は先輩が築いてきた伝統を守りながら、監督・コーチと共に、チームが一丸となり、元気で怪我のないようにがんばってください。

そして地域の皆様も、子ども達に暖かい声援をお願いします。

（取材　高橋委員）

特集『安方の昔』

多摩川用水と六郷用水

安方の歴史について語るには、どうしても多摩川の歴史から入らなければなりません。

大昔の多摩川は大雨が降るたびに、洪水を繰り返して、その流れを変え、田畑を流すという荒々しい川でした。その地域一帯は東京湾に注ぐ三角洲であったと想像されます。

安土桃山時代の後期、関東に入国した徳川家康は、まず、関東平野の開発を目的に、河川の改修工事を行いました。

この事業の一つとして、多摩川の水を狛江から取り入れ、六郷まで引き込む治水と新田開発のために、六郷用水を開削しました。

家康より、用水奉行に任命された小泉次太夫は、当時、稲毛・川崎領の代官でした。

代官はまず、安方村の名主である蔵方兵庫宅を宿所として、六郷領内のすべての名主を集めて、事業の内容と協力の要請をし、ただちに測量に取り掛かりました。

慶長2年（1597年）から15年に及ぶ大工事が終わり、全長30㎞に及ぶ六郷用水路が完成すると、開発した新田によって米の収穫も増し、農民の生活も潤うようになり、徐々に人が定住するようになりました。

その後も多摩川は、何回かの洪水を引き起こしましたが、以前のように荒ぶる川の様相は、堤防の整備とともに落ち着きを見せるようになりました。

（安方南町会・安方今昔より）

安方の昔

文化年間（1804～1818）の新編武蔵国風土記には、安方村について、次のような記述があります。

安方村は、市の蔵町の西の隣り、南は原町に接し、北は徳持村に境ひ、西は今泉矢口の二村なり。東西六町南北三町、水田多く陸田少ない。土性水利等はすべて市の倉村に同じ、家数二十四軒此村も開墾の年代を伝えず。

村の旧記に慶長十四年八月十四日新倉荘左衛門、大河満右衛門、大塚藤三検地とあらば、これより前の開墾なることはしれる。

右の検地に関わりし三人、いづれも御家人には聞こえた人なれば、恐らくは伊奈備前守忠次が検地させて、忠次か子半十郎忠治支配し、東海寺開し後、寛永年間近村と同時にこの寺領となる。

安方神社

明治39年に村々に何ヶ所もある小祠を一ヶ所に合祀せよとの政令二百二十号が発令されました。

安方村では、令が発令されてから、三年目に村の鎮守であった八幡神社に他の祠を合祀して、安方神社と命名したものと考えられます。

廃社となった神社は、次の三社です。

天祖神社

石井神社、おいせさまともいい、東矢口2-17辺りにありました。

社軍社又は釈護子社

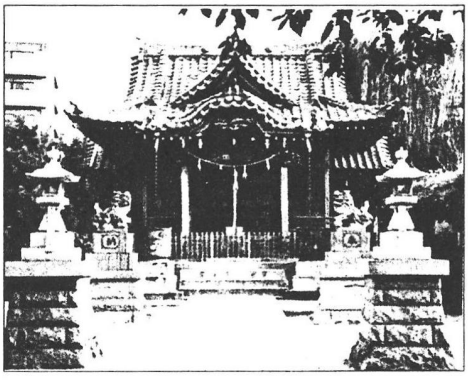
石筒神社と言っていたそうですが、土地では「おしゃもじさま」と言っていました。

この神社は風邪の神様で、近在からも風邪にかかるとお参りして、風邪が治るとお礼として、竹の筒に甘酒を入れて神社にお礼をしたという。

所在地は東矢口2-6-27

大六天社

土地では大楽天ともいったそうで、多摩川1-35辺りで、現在はライオンズマンションの中庭にあるお天狗様という祠は、昔京都の鞍馬山の行者か六部が、右の角に祠を建てて、天狗を祀っていたといわれる。



安方神社の祭神である
誉田別命について

応神天皇「日本書紀」「古事記」に第15代と伝える天皇、和風諡号は誉田別命「古事記・仲哀天皇段」に大鞆和気命ともあり、胎中天皇ともいう。「日本書紀・応神記」には、もと去来紗別尊とも言ったが、太子になってから、角鹿の笥飯大神と名前を交換して、誉田別尊と称するようになったとの別伝がみえる。

昔は八幡神社を武人が軍の神として、特に崇めて各自の武威を示すために建立されたといわれ、又、各地の郷か村においても作物の豊作や家内安全を祈願して、村人が土地や金を負担し合い、八幡様（土産神ともいう）を建立したものと思われ、神社というより、むしろ祠という程度のものが多くあったようです。

八幡神社の祭神となっている誉田別命の業績をたどると、戦いを主体としていた昔は別として、世界平和を願っている今日、安方神社を文明・文化・学問の神様として崇敬するのが適切だと思われます。

祭礼について

古老の話によれば、何時の頃からか明確ではないが、戦前までは安方八幡様では、祭礼を7月28日に行い、禰宜様といったそうです。

八幡神社の禰宜様は、神奈川県の平という所から来たそうです。

禰宜様は当日は餅を搗き、投げ餅をし、小泉政穂氏を招いて、神に神楽を捧げたといわれています。又、八幡様のお祭りには、安方から他地へ嫁いだ娘や、他地へ分家した息子等が、皆実家に集まり、お宮へお花（奉納）を捧げたものといいます。そのために嫁に出す娘には紹の着物を持たせたといわれており、そのように氏子は、村中で八幡様をお守りしたそうです。

戦中、戦後しばらくは神社が建立されてからも、祭りが行われておりませんでした。

そこで新倉氏に相談し、「人が生を享けた土地の思い出となるものは、子供の時、村や町の神社のお祭りがその人々の深い思い出となって残るもので、ここ何年も祭礼が無いのは親として子供達に申し訳ないので、何とかして祭りを行いたい」と話し、同氏も合意したので、総代へ強引に交渉し、昭和42年9月17日に戦後第一回の祭礼を行うことになりました。祭礼には一切強制的な寄付は行わず、氏子各位の御奉納によって賄うことになり、今日までその風習は続いております。

安方村の伝説

弘法大師の伝説
　○蔵方家の稲荷
日蓮上人の伝説
　○蔵方兵庫家の茶の間
　　日蓮さんがお茶を飲んだ
オシャモジ様
　○石筒神社　風邪の神
安方の口承文芸
　○木にぶら下がるムジナの話
　○小金井小次郎の賭場
　　寺銭用立てが一苦労
　○ウン太さん（生き返った話）
　○腰掛けた松の木は大蛇
　　多摩川の土手で（蛇の話）
　○戸をたたくムジナ
　　遍照院のお堂の下にムジナ
　○水を欲しがる稲荷さん
　　六郷用水が無くなった
　○狐の仕返し
　　狐をからかうと仇をされる
　○油揚げを狙われた話
　○嫁入りの時狐に憑かれた人
　○多摩川の河童
　　以上のような口承伝説がありました。

最後に

この度の特集「安方の昔」をまとめるに当り、安方南町会第4代町会長芹沢正市氏が昭和58年2月に起稿された小冊を参考にさせていただきました。

同氏は「あとがき」の中で、小冊を発行する動機をこう書いておられます。

参詣者から神社の由緒由来を尋ねられ、自身もなんら知識がも無く説明できなく、何とか致さねばとの想いから書き下ろしたとのことです。

安方は現在は安方北町会と安方南町会にわかれ、それぞれ独立しました。

（取材　柳通委員）

ご存知ですか？

矢口火力発電所

本紙11号でお知らせの通り、明治5年（1872年）に鉄道院（現在のJR）の蒸気機関車が新橋と横浜間に開通した。

その後、明治の後期になると環境・騒音・美観の観点から、首都圏の旅客輸送車両には、電化の機運が高まってきた。

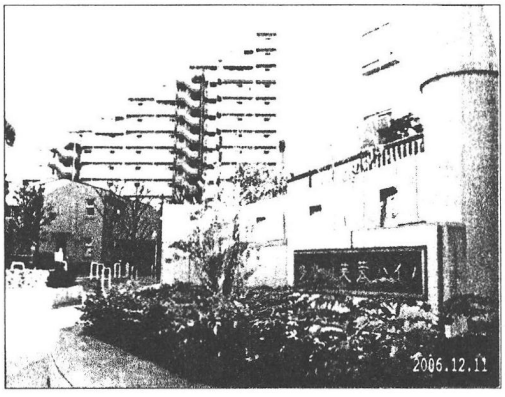
電車の運行には電力は不可欠であるが、電力はあらゆる産業生産の基盤として必需で、当時の電力会社には鉄道まで需要を賄えるほどの供給力が無かった。

そこで大正3年に、鉄道院は新橋と横浜間の全電力を安定的に供給できる、自営電力の「矢口火力発電所」を原村の多摩川河畔（現在の多摩川2-24）に建設し、操業を開始した。

赤い煉瓦造りの発電プラントは、ドイツの技師による設計・施工で、石炭を燃焼してボイラーで高圧水蒸気を発生させ、その蒸気でタービンを回転し、発電する「汽力発電」方式であった。

燃料の供給と廃棄物（石炭ガラ）処理は、蒲田電車庫の裏からプラントまで、引込み線を敷設し、貨車を利用した。

1500kWを誇る発電機を四基備えてフル稼働し、廃熱用の塔から轟音と共に蒸気を天高く吹き上げ、活況を呈していた。



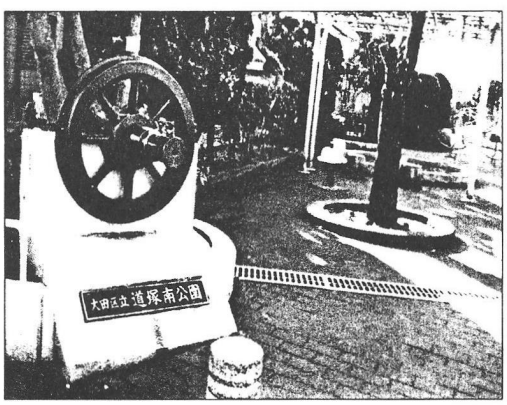
しかし、多摩川に放流する汚濁水（石炭ガラの冷却水）や、稼動騒音と地響き等の公害問題は深刻で、地域住民からの評価は芳しくなかった。

後に、大正12年9月の関東大震災でプラントが破損したのと、鶴見の臨海に新式の発電所が建設されたのを契機に、10年足らずで廃止された。

その後、跡地は中央工業と城南印刷工業が操業していたが、昭和20年4月、第二次世界大戦の戦火で消失し、戦後になり引込み線も撤去され、昭和電工の研究所とグランドになっていた。現在は「多摩川芙蓉ハイツ」に変身しているが、往時を懐古する形跡は皆無である。

唯一の名残は、かつて引込み線として活躍した電車庫からの跡地が、「道塚南公園」「道塚第三公園」「古川児童公園」等、用途を変えて小ぢんまりとした児童の遊ぶ施設になっていて、一隅に鉄道車輪をかたどったオブジェがあるのみである。

（取材　斉藤、滝口委員）



編集後記

わがまちの顔では、元気な子供たち、「矢口イーグルス」を取り上げました。子供たちの頑張っている姿は、我々にも元気を与えてくれます。今後も子供たちが安心して頑張り、笑える地域づくりのお手伝いの一助となれるよう、努力していきたいと思います。

また、わがまちの顔で特集してもらいたい人物や団体がありましたら、左記の事務局までお知らせください。

情報紙に対するご意見やご感想、また投稿などを事務局までお寄せください。

事務局　蒲田西特別出張所
大田区西蒲田七―十二―七
（三七三二）四七八五

蒲田西特別出張所管内

人口	男	29，382人
	女	27，039人
	計	56，421人
世帯		29，649世帯

平成19年2月1日現在